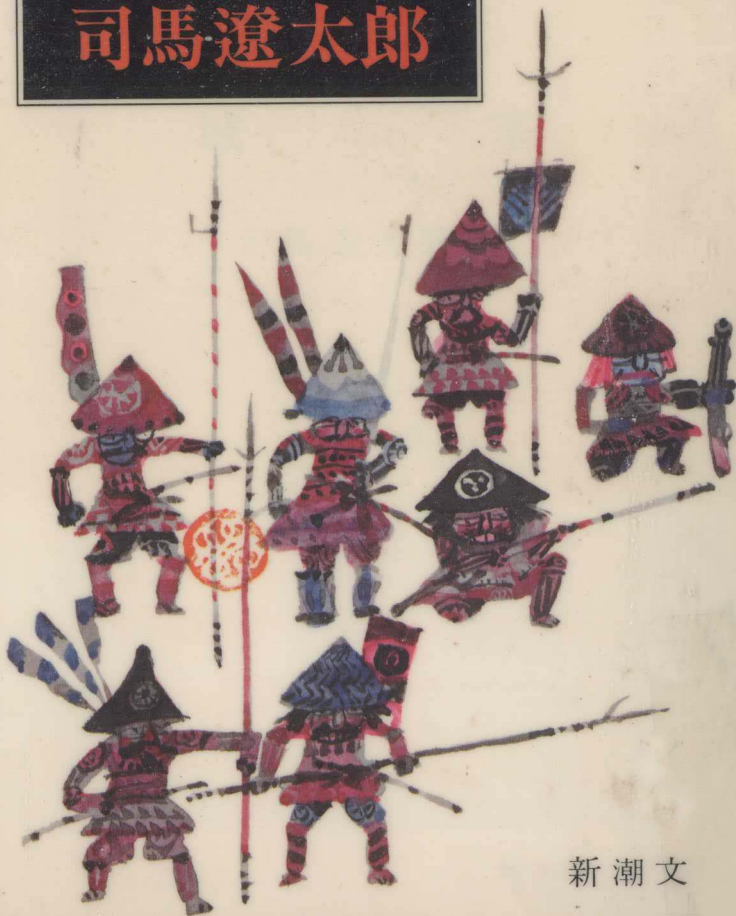


城塞(上)

司馬遼太郎



新潮文

じょう
城

さい
塞

上 卷

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 152 T

昭和五十一年十二月十五日 発行
昭和五十一年十二月三十日 二刷

著 者 司馬 遼太郎

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一

振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Ryōtarō Shiba 1976 Printed in Japan

新 潮 文 庫

城

塞

上 卷

司馬遼太郎著



新 潮 社 版

2374

城

塞

上
卷

少年

卷

上

唐突だが、生駒山をのぼる坂はいくつかあり、そのうち古事記にもあらわれるもっともふりい坂が、孔舎衙坂である。いまはこのあたりの赤土が切りひらかれて高速道路化され、阪奈有料道路になっている。

道は生駒山を蛇行してのぼり、やがて大和へこえる有料の峠になってゆくのだが、のぼりつつ途中でふりかえれば、いわゆる摂河泉（摂津・河内・和泉の三国——大阪府）の大眺望が眼下にひらける。

筆者は、この展望が日本のどこよりもすきで、大和へゆくたびに、大阪をふりかえる。ときに大阪湾が光り、神戸までが見はるかせることもある。

話に移るが、徳川家康にも、その経験があつたにちがいない。その生涯のうち何度か、かれは大和から大坂に入るべく生駒山を越えた。かれも大坂の野を見はるかしたのであろう。一望の田園は膏肉のようにゆたかであり、野は茅渟ノ海（大阪湾）をかこんで瀬戸内海に通じ、淀川はかれの当時百万人を養うに足るといわれ、さらには秀吉がつくつたその市街は、天下の富をあつめている。

城がある。

西欧の城塞をはるかにしのぐ、と宣教師たちによって讃嘆されたその巨城は、生駒の山腹から十分に遠望することが出来る。家康はすでに天下人になった時期、自然の感情としてこの野と海と城市を、手づかみしたくなるほどにほしかつたにちがいない。

「大坂は、およそ日本一の境地なり」

というのは信長記の文章であつたが、その信長は早くからここに海内の中心をおこうとし、しかしながら石山本願寺攻めにてこずり、計画の成らぬままに死んだ。秀吉がその構想を継いだ。かれは大坂を大明国までふくめた東アジアの中心にしようとし、十万人を収容できる巨城をつつたが、しかしその秀吉も、いまは亡い。

家康だけが、生きている。

だけでなく、秀吉の遺児秀頼もいる。ただ秀頼は、関ヶ原の合戦のあと、家康によって天下をとりあげられ、この見はるかす範圍の土地、つまり摂河泉のうちでわずか六十五万七千四百石という奥州の伊達家程度の大名にまでおとされてしまった。

「そのことは、江戸殿（家康）の悪謀である」

ということは、大名どもはいざしらず、京・大坂にすむ町人どもの定評であつた。町人どもは、家康を悪党とみた。新興の江戸は日に日にさかえているのにくらべ、京・大坂のにぎわいは、関ヶ原以後、とまった。

「しかしいずれは、江戸殿も、天下を大坂の秀頼御所におゆずりなされるのであろう」

と、町人どもはみており、その政権の大坂移譲が、京・大坂の繁栄を太閤のむかしにもどすための大きな希望になっていた。

家康は、世間の様子をうかがっている。

しかし、一方では徐々に自分の天下を津々浦々にみとめさせようとしている。

「無理なく、ゆるゆると」

というのが、家康というこのたぐいまれな現実主義者の変らぬ政治方針だった。たとえばかれは関ヶ原で大勝を得て事実上の天下人になったのは慶長五年であったが、しかしすぐには征夷大將軍にならず、それになったのは慶長八年である。同時に、江戸幕府をひらいた。これによって家康の天下は公認されたが、

「しかし、失望するにはおよばない」

といううわさを、京・大坂にながせた。

「江戸殿はなおも豊臣家を尊んでおられる。それが証拠に、江戸殿は朝廷に奏上して、秀頼御所を関白になさるそうだ」

將軍は武家の最高位であり、関白は公家の最高位である。世間の常識としてはほぼ同格であった。

「珍重々々」

と、京における最大の政界通ともいべき醍醐三寶院の門跡義演までが、そのうわさを信じ、日記のなかで手ばなしでよろこんでいる。しかし、むろんうそであった。が、家康は世間に失望はさせても絶望させることをおそれた。このとき、ほぼ同時期に、関白ではないとはいえ、公家の最高位にちかい内大臣を、十歳（満年齢）の秀頼のために世話をした。

「京・大坂の人氣はどうか」

というのが、家康の懸念であつた。江戸政権を歓迎しているのか、それともなおも豊臣政権の復活を幻想しているのか。

「よい思案がございます」

と、このころ、それを測定するための妙案を献言したのは、家康の政治顧問のひとりで大坂討滅を最初から主張しつづけている金地院崇伝であつた。

たまたま慶長九年八月は、故太閤の七回忌にあたる。その忌をにぎやかに営みたいということ、京の豊国大明神とよくにの社が京都所司代にねがい出ていた。

塞
「どうしたものか」

と、家康は思案にあぐね、側近に諮問した。家康にすれば、いまさら前時代の主権者の記憶をしもじもによびさませるような行事はゆるしたくない。が、金地院崇伝は、

「いやなに、時勢が變つたことは京者も存じております。ご案じになるようなことはございますまい」

それよりもむしろ祭礼をやらせたほうがよろしゅうございましょう、なあに人はあつまりませぬよ、といった。

家康は、ゆるした。

ところがその祭礼当日の八月十四、五の両日は、京の男女という男女が都の大路小路におどり出、

——太閤さまじゃ、太閤さまじゃ。

と、手足を舞いまわし、列を組んで練り、夜は夜で燈火をかざして踊り、時のみかどの後陽成ごようせい

帝までがわざわざ紫宸殿^{しんごん}まで出て町民のおどりを見物されたということで、当時駿府^{すんぶ}（静岡市）にいた家康は、報告をうけて大いに意外の思いがした。上方者^{かみかたもの}たちは単に前時代の支配者を慕っているだけでなく、大坂に残存している豊臣家にいまだ一度政權をとらせることを乞いのぞんでゐるのであらう。

家康は、不安になった。

「上方者は、思いちがいをしている」
その思いちがいを、いまのうちに訂^{ただ}す手をうつておかねば、わざわざを今後にのこすかもしれない。」

家康は、巧妙であつた。

まずかれは隠居をし、豊臣家を無視してその子秀忠に將軍職をゆずってしまった。豊国^{ほうこく}祭のあつたあくる年の慶長十年春のことである。

このことは、上方に衝撃をあたえた。

——なんと、秀頼御所にお譲りあらぬか。

「あたり前よ」

と、当の家康は、上方の世論に対し江戸からどなりかえしたかつたであらう。かれは慈善のために天下を斬りとつたのではなかつた。

さらに家康は、物わかりのにぶい上方者の世論を転変させるために、いまひとつの大きな手をつた。ただし武力は用いず、人数を用いた。十六万騎の侍を美々しく行装させて京にあつめたのである。新將軍秀忠の將軍宣下^{せんげ}の儀式に参加させるためであつた。

これが、四月十六日である。

五月一日、將軍宣下にとまあ諸大名の祝賀登城がある。場所は江戸ではなく、かつて秀吉が築いた伏見城においてであった。この盛事をみれば、上方者はいやおうもなく時勢の転換したことがわかるはずであった。

さらにわからせるには、大坂城にいる十二歳の豊臣秀頼を伏見にのぼらせ、諸大名と同列に新將軍の就任を祝わせることであった。

家康は、このとき伏見城にいる。

塞

「伏見にのぼられよ」

と、ひとを介し、大坂に命じた。大坂にとって、これほど政治的残忍さをあらわした要求はなかったであろう。家康は、形式上は豊臣家の家来である。秀頼のまわりの者は秀頼以外に天下の後継者はないと信じており、さらには、朝廷における序列は秀頼のほうが秀忠より上であった。

秀頼はこのころ内大臣から右大臣にすすんでいたが、新將軍秀忠は、征夷大將軍ではあっても同時に内大臣ではない。

「どこの世に、主人たる者が、家来の祝賀に馳せつけるであろうか」

と、大坂の侍女筆頭の大蔵卿局おむくろきょうのつばねが、このつかいの口上をきいて悲憤した。

「大坂のあほうも、これで極まった」

といったのは、家康の謀臣である本多正純まさみづみであった。正純は、関ヶ原当時における家康の謀臣本多正信の子である。

正純の解釈では、

城

「関東の御温情、これ以上のものはない」

というのである。

わずか六十五万余石にすぎぬ豊臣家には、もはや天下人たる実質はなく、さらには豊臣恩顧の諸大名のことごとくが関東の系列に入ってしまったているいま、豊臣家が孤立しつつも残存しているこの状態は、ひとえに関東の温情によるものである。ほろぼされまいとすれば、いまの変則的孤立をすてて旧傘下の諸將と肩をならべて新將軍徳川秀忠の家来になる以外に道はない。そのためには伏見にまかり出て、秀忠に拝謁し、大広間で「謁」をかたじけのうするという形式をとることによって主従の関係をあきらかにするがよい。そのようにすれば、豊臣家は徳川家の一大名として将来にむかって安全は保証されるであろうというのが、本多正純の「温情論」の論拠であった。

「おひろい（秀頼）は、その機会をうしなつた」

と、正純は、伏見城の詰ノ間で、他の大名をつかまえて高声で論じた。

江戸は、そのような肚でいる。

「あほう」

と正純がいったこの時期以後の大坂のことを、大坂なりの感情やら道理やら人間の模様やら、なにやらとりまぜてこの稿で書きすすめてゆく。書くについて、その前にいま一度、生駒孔舎衛坂の有料の峠にのぼってみた。のぼるにつれて大阪湾とその平野の展望はいよいよ大きくなったが、しかし日が悪く、野も街も灰色の霧がこめ、ほんの十年ほど前なら見えていたはずの城も見えなかった。

「むりですよ」

と、同行のN君がいった。

「家康も秀頼も、公害にはかなやしませんよ」

かもしれない。

ともかく車からおりて眼下の霧煙を見おろしながら、家康の心境をおもってみた。

この慶長十年、二代將軍秀忠の將軍宣下における大御所家康の年齢は、六十三である。

その健康状態については、

「ちかごろ、江戸殿は古い、目などかすむことがしばしばである」

という、大坂にとってよろこぶべきうわさが、このころ豊臣家の殿中に流れた。家康にとって
は單なる老年の生理にすぎないことが、大坂にとっては存亡を左右するほどの政治的重大問題に
なるところが、この時期の世間のふしぎさである。まことに家康が老衰して死んでしまえば、局
面はがらりと變るであろう。政權は江戸からふたたび大坂にうつるにちがいがなかったし、すくな
くとも豊臣家の奥ではみなそう信じていた。一面、道理でもあった。豊臣旧恩の諸大名は、家康
個人の威望をおそれて關東に臣従しただけであり、その家康さえ死ねば、諸大名はあらそって東
海道を西に走り、秀頼のもとにもどってくる——かもしれない。

ところが、家康の健康状態は、わるくない。

五年前の關ヶ原のころは、体重がどんどんふえてついに自分で禪まじも締められず、毎朝、侍女が

前後からかれの禪を締めるという滑稽な状態にまでなったが、その後家康は懸命に瘦せようとした。痩せることが長命のためにいいということを家康が知っていたということは、保健思想からみて、家康は世界的な存在かもしれない。

かれは若いころから医学に対して異常なほどの関心を持ち、老いてのちは独特の医学観をもち、むしろ自分の侍医たちの考えの浅さをわらうほどにまでなっていた。さらにまた、この人物は十七世紀初頭の人間でありながら、運動が保健のもとであるということを体験的に知っており、しかもそれがかれの日々の生活規律にまでなっていた。

家康は毎朝、馬場に出て馬を責め、さらに鉄砲を三発、撃ち放った。火繩銃射撃は、発射ごとの反動をやわらかくするため、うつやいなや体をはげしくまわす。十分に運動になった。

さらには、たえず鷹野たかの（鷹狩）をした。

「鷹野ほど体によいものはない」

と、家康はつねづね言い、そのことばが側近の者によって書きとめられ、「中泉古老物語」というものになってのこっている。

「そのわけは、風寒炎暑もいとわず山野を走りまわるために筋骨労働し、その結果、手足が齡にしては軽やかになる。また夜は疲労して快寝（快眠）するから、閨房けいぼうにもおのずから遠ざかる」また夏は水泳もした。

かれが最後にその水泳の現場をひとに見せたのはこの慶長十年より五年あと、駿河するがの瀬名川で川獺をしたときである。すらすら泳いで向う岸とのあいだを往復した。

要するに、かれの健康は、大坂方にとって不幸なことに、死期の近づいているような様子はない。

一方、秀頼である。

——右大臣家は、どのようなお顔の、どのような心映えのお人か。

という、ただそれだけの簡単なことが、京・大坂だけでなく、関東の在京役人のあいだでも知られていない。いずれも世間の関心のまとであつたが、しかしくわしいことは、もつとも利害関係がふかいはずの家康ですら知らない。

「太閤に似て、小さく黒髪えの人」

という説も京あたりではおこなわれているが、むろんあてずっぽうである。

——心映えかしこからず。

といわれているが、これもどうであろう。世間の風にあたることのない御殿育ちの子が物事に鋭敏な反応をもとうはずがないという臆測にすぎなかった。

生母は、世間では、

「お袋さま」

とよばれている。いわゆる淀殿である。そのお袋さまが、秀頼を自分の侍女団以外の他人には見せたがらず、たとえば家老の役をつとめる片桐且元をすら近づけなかった。且元は年のはじめの拝賀などで、大広間のはるかむこうの上段ノ間に、乳母の宮内卿局以下の侍女十人ばかりを従えてすわっている少年の姿を上目で見るのみで、どういう貌かとまではわかりにくい。

一方、少年のほうも、自分の家老が、

「市正いちのかみ（東市正・且元の官名）」

という男であるという程度のこととは知っているが、貌つきとなると、さだかでない。そのうえ、——市正には、ご用心召され。

という悪評を、母の淀殿や乳母からきいていた。且元は家康が任命した家老であつたから、当然ながら関東に通じている、というのである。

秀頼は、その生母の意思でつねづね侍女団にとりかこまれて暮している。その女どもは、水仕事の水までをふくめると一万人はいたであらう。

かれは、慶長八年、十歳のときに妻をもつた。その妻は、徳川家からきた。祝言の杯のとき、ふと、

「姫は、なんと申される」

と、この少年にしては、めずらしく積極的にひとにものをきいた。うまれてこのかた、外部の人間というものを見たはじめての経験がこの少年に常軌をうしなせたのにちがいない。

障子にひびくような、高声である。よく透る声で、豊臣家の役人たちも、秀頼の声というものはじめてきく者も多かった。

もっとも、介添えをする両家の女どもは、たれもが狼狽した。祝言のときに婿どのがものをいうなどという作法はない。

姫は杯を宙にもち、杯ごしに秀頼を見つめたまま、返事もできずにだまっている。このとき、彼女は六歳にすぎない。

しかし、

「八歳にはみえる」